

ドイツ語発音の一般則

ドイツ語の発音は綴りに対する依存性が極めて高いので、その規則を覚えていただく手段の一部をご紹介します。

1. 母音

普通はローマ字読みで良いので、例外のみ記述しました。

(1) 母音の長短

ドイツ語では母音の長短が発音に影響します。eの綴りが当てられる母音は長母音では「イ」に近い発音になることが知られていますが、その他の母音も一般的に長母音は口をやや閉じた発音となります。母音の長短が考慮されるべきなのは最強のアクセントが置かれる母音です。ドイツ語の単語の大部分は1音節か2音節からなり、3音節以上の単語は1音節か2音節からなる単語が合成されたものである場合が多く、2音節からなる単語はたいてい最初の音節にアクセントがありますので、母音の長短を見分ける規則を覚えれば「つかみはOK」。以下の記述には例外もありますが、例外は例外で紹介するとして、おおざっぱには以下のような規則があります。

・母音に続く子音の綴りが1文字の場合 長母音

例) König (王)、Leben (生命、生活、生涯)、Name (名前)

・母音に続く子音の綴りがhの場合 長母音

例) Ehre (栄光)、fröhlich (喜ぶ)、ihn (彼を)

・母音に続く子音の綴りがh以外で2文字以上の場合 短母音

例) Harfen (竖琴、ハーブ)、Rechen (熊手)、singen (歌う)

例外) Buch (本)、möglich (願わくば) 但しこの単語の元は助動詞mögenで、それを考慮

すればこの単語も規則に当てはまります。一般的に、格変化する単語は原形の綴りで判断すべきものが多いようです。

(2) 変音・ウムラウト

ウムラウト用の活字がない場合、各々はeを後ろに付けて代用します(ä=ae, ü=ue, ö=oe)。したがって最初の文字が唇と顎の形、舌の位置は常にeという覚え方でも良いでしょう。

・ä 唇と顎は「ア」の形で、舌の位置は「エ」で発音します。äの長母音は、録音によっては「イ」に近い発音のものもありますが、標準語は普通の「エ」のままで良いそうです。

例) Märchen (童話)、erzählen (語る)

・ü 唇と顎は「ウ」の形で、舌の位置は「エ」で発音しますが、口の開け方が狭いため、実際には「イ」を言うつもり、という言い方が多いようです。

例) küssen (キスする)、über

・ö 唇と顎は「オ」の形で、舌の位置は「エ」で発音します。

例) König (王)、Köpfe (頭 [複数形])

(3) 長母音・二重母音

・ie イの長母音となります。

例) Liebe (愛)

・ei 「アイ」となります。

例) Reigen (踊り [古語])

・eu, äu 「オイ」となります。

例) euer (我らの)、Häuser (家 [複数形])

(4) 語尾の母音

2音節以上の単語の語尾の母音の大部分はeで、その発音は曖昧母音となります。

2. 子音

これもローマ字読みの規則から外れる部分のみご紹介します。

- b 語尾および子音が続く場合は[p]の発音となります。
例) lieblich (愛しき)、Leib (肉体)
- ch 敢えて日本語的な言い方をするならば、八行の発音を母音に続くものとして、より喉の奥を振るわせるものとして捕らえます。
例) nach, mich, Buch, Rechen, noch
例外) höchst 標準語では上記規則に従うが、歌の場合は[k]の発音となることがある。
- d 語尾および子音が続く場合は[t]の発音になります。
例) Mädchen (少女)、Magd (女中) ちなみにこの2つも例外の長母音です。
- g 子音が続く場合は[k]の発音になります。
例) Magd (女中)
語尾の場合はch同様の発音となる場合が多いようです。
例) ewig (永遠)
例外) mag この場合は[k]の発音となります。mögenの1・3人称単数現在形。
これは原形が[g]の発音をする場合と言えます。
- h 語頭では発音しますが、母音に続く場合はその母音を長母音化させるのみで、実際には発音されません(「1.(1)母音の長短」でも記した通りです)。
例) Höhe (高さ)
- j y[j]の発音となります。
例) ja (肯定の応答、英語のyesに相当)、Jesus
- q uと共に[kv]という発音になります。
例) Quelle (泉)
- s 基本的に母音が後ろに続く場合は濁ります。
例) sagen (言う) 濁る
Auslese (選別、えり抜き) 3文字目のsは濁らず6文字目のsは濁る。
例外) unsrer (我らの) 規則では濁らないはずだが...
ch, p, tが続く時シュ(の母音がない発音)となります。
例) Schwester (姉妹)、sprechen (話す)、Strafe (刑罰)
* それ以外の子音が続く言葉は外来語源のものと言えるようです。
- v [f]の発音となります。
例) Volks (国民の、ドイツの代表的な自動車「フォルクスヴァーゲン」で有名)
- w [v]の発音となります。
例) Weg (道)、wissen (知る)

3. 単語のリエゾンについて

ドイツ語では基本的には単語の連続時はリエゾンませんが、合唱では例外があります。学生時代に、H.リリンク教授の指揮で「マタイ受難曲」を歌うという幸運な機会がありました。その経緯は同曲解説に譲りますが、第27曲の歌詞の発音について、以下のような指示が出ました。

Laßt ihn Laß-tihn

bindet nicht binde' nicht

Sind Blitze, sind Donner Sin' Blitze, sin' Donner

リリンク教授の補足説明では、これらは皆さんが日本人でドイツ語に不馴れだから妥協してのことではなく、合唱特有の手法であるとのことでした。幸いにも私は、学生時代に音響関係の勉強もしたので、これらについては以下のように説明できます。

・合唱は独唱と比較すると、子音が客席まで届きにくい。

母音は共鳴（または共振）という現象が生じるため、同じ音高で同じ母音を発音すると、2人の場合は $1 + 1 = 2$ かそれ以上（実際にはそうはなりません但し例えとして）の響きとなりますが、子音は $1 + 1$ は 1.5 以下にしかありません。同じ音高で同じ母音を発音する人数がもっと増えたとしたら、子音は母音と比較すると増々弱くなってしまいます。

更に客席で聞く立場の聴衆の聴覚特性として、母音と子音が同時に存在すると、子音は母音に打ち消されがちになる、という傾向があります。これはあるパートが母音、別パートが子音を発音している場合は当然ながら、同一パート内でも子音を発音するタイミングがずれたとしたら、それだけで母音と子音の重なりが発生し、子音が弱まってしまうことを意味します。

それではそれを極力防ぐにはどうしたら良いかということ、以下のようなことが必要です。

・普段の会話時以上に子音の発音を強調する。

・大事な単語の子音の発音のタイミングを揃える工夫をする。

上記のリリンク教授の指示は、以上のような根拠に基づいて、大事な単語の子音の発音をタイミング的に揃えるための工夫なのです。言語学的あるいは独唱の立場では、語尾とそれに続く語頭を厳密に発音するのが正しい姿勢であるとしても、合唱の立場ではむしろ協調性を乱すものとなることを認識すべきです。上記の例のような単語のリエゾンの指示があった場合は、その指示に従ってください。

2003.7.9・萩野